

現代の隨想

食後の花束

開高健

現代の隨想

食後の花束

開高健



日本書籍

現代の随想

食後の花束

定価 一五〇〇円

昭和五十四年六月一日 第一刷

著者 開 高 健

編集人 浜 田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

発行所 日本書籍株式会社

東京都文京区小石川四一四一二四

☎ 一一二

電話 03・813・8111

振替 東京6126184

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

〈検印省略〉

食後の花束 ■ 目次

I

告白の文学論

7

現代文学の停滞と可能性にふれて

あまりにもそこにある

39

ディストピア文学管見

II

名は体をあらわすか

61

私の文章修業

70

私の創作衛生法

75

悲惨と笑いと狂騒

80

明晰の悲惨

83

匿名の自然

87

旅

90

作家と旅

92

眼をあけて見た悪夢	96
笑えない時代	99
日本脱出の夢	103
クジラを拾う話	105
栗津潔との対話	109
腐る	119
瞬間の大河	123
島国と道路と戦争と	128
アジア人の心について	132
一九五九年 秋	152
一九七九年 年始	167
二日のようだった二〇年	177
小さな話で世界は連帯する	181

III

酒の王様たち

197

珍酒、奇酒秋の夜ばなし

206

夕方男の指の持っていき場所

219

君は不思議だと思わないか？

224

買ってくるぞと勇ましく

229

エラクなりたかったら独身だ、スキヤキだ

234

中年男のシツクな自炊生活とは

239

IV

ワイセツの終焉

255

一億人の自殺者

271

あとがき

288

I

告白的文学論

現代文学の停滞と可能性にふれて

ある年のある冬の午後、モスコーで、私は大江健三郎といっしょに、『外国文学』という雑誌の出版所へでかけた。編集室へ顔をだしてみると、編集長のチャコフスキーが長い体を椅子から起こしてきた。東京で会ったときとおなじようにウサギとタヌキがくっついたみたいな顔でこやかに笑っていた。一度だけれど私はこの雑誌に東京についてのエッセイともルポともつかないものを寄稿したことがある。チャコフスキーとはその原稿の件で帝国ホテルのロビーで会った。日あたりのよいガラス窓のしたで紅茶を一杯飲み、文法的には正しいがきわめてのろくて発音は奇怪不思議という英語で話しあい、たしか紅茶のお代は彼が払った。

通訳をひきうけたリヴォヴァさんが幼稚園の先生のように私たちをつれて編集室に入ってゆくと、何人もの編集員がでてきてとりかこんだ。彼ら、彼女らは、現代アメリカ文学の専門家であつたり、現代フランス文学の専門家であつたりした。お茶を飲みながら世間話をした。モスコーをどう思うか、とか、ロシアほどコーヒーのまずいところは珍しいと思いませんか、などとい

う話をして彼らは笑った。するとその話のさいちゅうに、話がはじまってものの一分もたつたぬかに、とつぜんチャコフスキーがたずねた。

「文学とは何ですか？」

いきなりそう聞くのだ。

かねてからこの種の質問が私にはが手なのだ。答えようとするよりもなによりもさきにぐったりと疲労をおぼえてしまうのである。私は武者小路実篤ではないのだし、頭のなかに整理戸棚があつてカード箱を準備しているわけのものでもない。それに、この種の質問をつきつけられるときまつて新聞の「人生相談」欄がちらちらと眼に浮かんできてしようがないのである。無名時代のカフカが無名の文学青年と対話している記録を読むと、つぎにどんな作品を書く予定ですかと幼い弟子にたずねられて、若い作家は、「その質問はつぎの瞬間に君の心臓がどういう鼓動をうつのかと聞くようなものだよ」と答えて、なにもいわないのである。この挿話にある機知とにがさと苦痛が私は好きで、うまいことをいうものだと感心させられたことがある。文学トハ何かとだしぬけに小さな、丸い眼をパチクリさせて聞かれても、私にはどう答えてよいのかわからない。「ひとことでは答えられませんよ。まるで人生とは何かと聞くようなものじゃないですか。人生とは何ですか？」

チャコフスキーはリヴォヴァさんが通訳するのを聞いてニコニコ笑つてたちあがり、待つていましたというような口調で、「グッド・ボーイ、グッド・ボーイ」とつぶやいた。クマのように首をふつてあたりを歩きまわりながら、うたうようにして私にいう。

“Tell me what is life and how life should be. Tell me……”

秋の午後の部屋でバラの花がおちても壁が崩れるかと思えるような音にひびく、そのような口調でその質問が発せられたのなら、あるいは私はそこにこめられた焦燥の気配におどろいて黙ってしまったのかも知れない。けれど彼は何百回も舞台にたったアリア歌手のようにとか、あるいはたったいま油の罐からひきあげたばかりの歯車のようにとか、そのような調子で質問を発した。流暢で、なめらかで、よどみがなく、ヒバリのように陽気ですらあった。

「……その質問に答えるのは、まるでガラス玉をペン先でつくようなものだと思いますね」

「通訳スルコトハシマスケレド、一体コレハ何デスカ。意味ガヨクワカリマセンヨ。説明ヲシテクダサイ」

「ガラスの玉をペン先でつづいたらやたらにインキがとぶだけでしょう。おさえようとしてもおさえられませんからね。この質問に答えるのはそういうことじゃありませんか。どう答えていいのかわからないし、いくらしゃべってもきりがないですよ。インキがとぶだけじゃない。ツバもとびますよ」

「ソウデスカ？」

「そうですよ」

リヴォーヴァさんから通訳を聞いてチャコフスキーはあきらめたらしく、回れ右をして大江健三郎に向かった。つぎにどんな作品を書くかとしているかと聞いた。ちょうどそのときはわが友の脳神経叢のなかではスイッチが躁鬱症の“鬱”のほうに入っていたようだった。彼はうなだ

れて、細い眉をピリピリそよがせ、髪をひっかきまわしつつ、どもりどもり、現代日本では朝鮮の少年が被圧迫民族のコンプレックスを解放しようとして日本の少女を強姦するという主題で中篇小説を一つ書きたいのだといひだした。チャコフスキーたちはびっくりし、困惑におちこんで、話題をそらした。私たちは一時間ほどその部屋にいてお茶を飲み、にこやかに握手して別れた。

けれど彼らはこれでひきさがってしまったのではなかった。二、三日したらリヴォヴァさんが編集部からだといって英文の手紙をホテルに持ってきた。読んでみると、私たちに宛てた質問状であった。大意は、ほぼ、つぎのようであった。今日の西欧文学は人間の崩壊と孤絶を説くことしか知らないように見うけられるが、その現状と原因をあなたはどうお考えになるか。とりわけ「前衛」と呼ばれる派の狂気をどうお考えになるか。現代の西欧文学のある種のものにはその国の読者にほとんど母国語で書かれたものだと信じられないような性質の作品さえあるが、広範囲にわたって発見されるこの狂乱と無道德化の傾向は何に原因するのであろうか。昔のロシアの作家たちも同時代の錯雑する矛盾のなかで苦しんだが、彼らは絶望におちこみながらも自己の個性をとおして作品を書きつづけ、けっして探究心を放棄しなかった。私たちはそう眺めているけれど、現代の西欧文学は読者に人間には他者との関係が存在しないのだということを知らせることだけにふけているかと思われる。私たちは文学が複雑微妙な諸要素によってつくられるものであることを理解しているつもりなので、けっしてこの答えが簡単なものになることを期待してはいないが、あなたの立場からの説明を寄せて頂きたい。そして、できることなら、文学とは何であり、また如何にあるべきであるかについても、あなたの意見を本誌の読者のために述べて

頂けたらと思う。

パンツ一枚になってベッドにもぐりこむと、私たちは毛布から顔だけだし、ウオトカの大瓶を手から手へとまわし飲みしながらこの手紙を読んで、ため息をついた。

「ぶっつけてきたぞ」

「ロシア人はまじめなんだなア」

「本一冊書かなくちゃいけない」

「一冊で足りる？」

「さあ、それは……」

「一行も書けないんじゃないの？」

「ロバよ、空をとべ」

「ミミズよ、走れ。酒のみミミズ」

瓶を手から手へとやりとりしているうちに私たちはキラキラ輝やく熱い朦朧の川を浮きつ沈みつしながら流れていった。ニンニクの匂いのまじった、虹のような息を吐きながら私たちはとりとめもないことを口走った。『嘔吐』のなかに「火曜日。記すべきことなし。存在した。」とあるけれど、みごとに名文句ではないか。小説はたったいま釣りあげたばかりのエビのようにピチピチしていて少し不安を感じさせるようなものでないといけない、マヨネーズがかかってはいけない。上田秋成の短篇にお金の精ができて説教をするという話があるが、あれは傑作であった。ヘミングウェイの短篇では老人がレストランのすみっこに腰かけてひとりごとを毎晩つぶや

いていたな。そうだ、そうだ。"虚無の虚無、虚無の虚無なる虚無の虚無"、ナーダ、ナーダ、ナーダ、イ・ナーダ、ナーダ、ナーダ。とつぜんわが友は女体についての解剖学用語を口走り、『サムライ日本』をうたいたし、新納鶴千代苦笑いとうなつてミエを切り、フレンチ・ドレッシングが冷蔵庫のなかでふるえながら"アイ・アム・ドレッシング"といったという笑話をし、それが気ぬけしていたのでしょげこみ、あなたは偽善者だと真ッ赤な顔をして怒り、渡辺一夫先生は近頃いけない人だけれどいい人なんだから一度会わせてあげる、ぼくは毎朝エキスパンダーとダンベルを使って体をきたえているんだよ、見てごらん、ホラ、ホラ。いきなりベッドからとびだしたかと思うと力道山みたいな格好をして力コブをつくってみせる。逆三角形になるからさわってみろというのである。いわれるままに寄っていつてチョイとつまんでみたら逆三角形はマシユマロみたいにならずにプワプワしていた。どうです、すごいでしょうというから、マシユマロみたいだと答えたら、マシユマロ、マシユマロ、つまらない人だなアとうめいてもとの毛布に頭からもぐりこんでしまった。朝から晩まで毎日毎日おなじものを食べているせいであらうか、私がプウと鳴らすと彼もプウと鳴らし、ひょいと顔をだして、いまのはフランス語では"ブリュイ"というのでしょうか、"ソン"というのでしょうかと聞く。音響学的には前者でしょうが会計学的には後者でしょうと答える。毎夜毎夜おなじようなことになり、毎夜毎夜ニタニタと脂っぽい薄笑いをうかべて眠りこけ、あぐく二人ともダルマさんみたいに太ってしまった。ヴヌコヴォ空港には氷雨がしとど降っていた。東ベルリンへ向かう飛行機のなかでは、肉体が精神を蝕んだのだといいかわしてイモ虫みたいにコロコロに太ったたがいの頬を嫌悪と憐れみと侮蔑をもって眺め、な

にやら行方知れぬ疲労をおぼえて眠りこけた。

ガラス玉がころがる。

日本へ帰つてからたつぶり一年以上たったのだけれど、東京の町と勉強部屋のインキ瓶のなかをミシンコのようにちよこまかと跳ねまわる日がつづくばかりで、モスコーには何の返事も書かなかった。手紙そのものが紙屑籠と古本屋をひっくりかえしたみたいな勉強部屋のどこかへ逃げて姿を消してしまった。この原稿は記憶をたよりにして書いているのである。にぶい歯痛みたいに彼らの間いが頭にひっかかっているものだから、あらためて書いてみようかとのりだしてみたのだ。西欧文学ハ墮落シテオルカ。文学トハ何ゾヤ。文学ハ如何ニアルベキデアルカ。神田や築地の旅館を泊り歩きながらぶつぶつぶやいてみたところ、これはついに言葉の遊びの一種にすぎないのではあるまいかという疑いと想像が空のどこからかおりてきて体のなかに入り、ドツカとあぐらをかいだ。それきりサンショウウオみたいにとたりとよこたわったきり、小さな、鋭い目をパチクリさせて私を眺めている。その視線に追いついては私に、私はふとんのなかで思いを致すのである。これは言葉の呪文である。ひっかかっているとき、おまえは文学トハ何ゾヤと自分に問うか。インキと字を飛散させることにふけているとき、おまえは文学トハ何ゾヤと自分に問うか。そのような問いは作家が作品を書きあげて、一つの自分を消費しつくした疲労のときにしか浮かんでこないものではないのか。炉のように熱い女友達の体のうえにいるときに人は人生トハ何ゾ

ヤと、惡魔に出会うまえのファウスト大博士みたいな蒼ざめた吐息を自分に向かつて吐きかけるものであろうか。そういうことをしてはいけない。そういう問いを發したくなったら町へでかけるか、居酒屋にもぐりこんで觀察と蒙昧にふけるか、旅にでるべきかである。昼寝するのもよろしい。電話が鳴ってもとりあげるな。町をよこぎり、人を眺め、眠り、新しい音楽と水がわいてくるまでゆつくりと待つべきである。女友達についていえば、妒のように熱い体からおりたあとは、いっしょに裏町の安料理屋へいって何か精のつく、しつこくないものを食べるがよろしいのだ。別れたあとで勉強部屋へもどって、人生トハ何ゾヤ、一夫一婦制トハ何ゾヤなどと考えないのがある。そういうときには言葉は肉から離れている。言葉は物であると同時に物の影でもある。疲れたときには青い澱みの底でついに言葉は影でしかないではないか。そして、言葉で人生を考えると、人生はついに空無でしかないではないか。夏の激痛が終わればリンゴの木は眠るのだ。必要なのは樹液のひそやかな旅である。樹皮を剥いで、維管束をメスで薄片にして、色素で染めて、死んだ一部分を顕微鏡で覗いたところで、たいくつで正確な知識の破片のほかに何が手に入るだろう。熱く楽しんだあとで冷たく批評して、明察を誇ったところで、それが何になるのだ。講座物の知識にはなにやら「昼ノ上ノ水練」みたいなところがあるのではないか。おまえはかねがね「樽平」のすみっこでギンナンの殻を割りながら氣弱にそうつぶやいていたのではないかったか。そしてそのあとで眼をふとおとし、焼きたてのギンナンの実はヒスイそっくりだなア、これだと一コ二〇万エンぐらいするだろうかと、はればれ視線を吸いこませることに我を忘れるというぐあいではなかったか。それならそのことだけを書いていたらいいのではないか。